

Start!

はじめに

市政発展の歩み

私たちのまち「鎌倉」では、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡が見つかっており、鎌倉時代より前から、長い歴史を有していることが分かります。

「鎌倉」という地名については、由来が諸説あり明らかではありませんが、『古事記』（712年）の景行天皇の条には「鎌倉之別」とあり、初めて鎌倉という名が見られます。また、綾瀬市宮久保遺跡で出土した天平5年（733年）銘の木簡には「鎌倉郡鎌倉郷鎌倉里」の記述があり、現在の御成小学校の場所では奈良・平安時代の郡役所である「郡家」と考えられる遺構が見つかることから、当時の鎌倉が周辺一帯の中心的な場所であったと考えられます。

そして1180年、源頼朝が東国の武士たちとともに鎌倉に入り、以後約700年間続く武家政権の発端となる日本で最初の本格的な武家による政権である鎌倉幕府を打ち立てます。それから新田義貞の鎌倉攻めで幕を閉じるまでの約150年にわたり、鎌倉は日本における政治、経済、文化の集中する都市として繁栄しました。また幕府滅亡後も、室町時代の中頃までは東国の中心として栄えました。

その後、明治時代に至るまで、都市としての繁栄は衰退しますが、鎌倉時代以来の社寺は後北条氏や歴代の武家政権によって保護され、江戸時代には、鎌倉幕府ゆかりの地として、江戸の庶民などが多く訪れる観光のまちとなります。

明治維新の後、廃藩置県により、鎌倉は蕪山県から神奈川県に所管となります。この頃から良好な海水浴場として鎌倉の海が広く紹介されるようになり、明治22年（1889年）2月の横須賀線開通、明治43年（1908年）の江ノ電全線の開通により、さらに多くの人が訪れるようになりました。

大正の時代になると、鎌倉は別荘の地、観光の地として、多くの文人・文士が住むようになり、街としてさらに発展していきました。

そして、昭和14年（1939年）11月3日、当時の鎌倉・腰越町が合併して市制を施行し、昭和23年（1948年）1月1日には深沢村が、同年6月1日には大船町と合併し、現在の市域となっています。

総面積39.66km²、周囲35.2kmで、神奈川県南東部に当たり、また、三浦半島の基部に当たる本市は、現在も豊かな歴史的遺産とそれを包む山並みや海岸線など、豊かな自然に恵まれ、様々な行事や社寺・谷戸の散策などを通じて、多くの方に親しみをいただいています。

総合計画策定の背景と目的

今、インターネットや携帯電話の普及等、人々の生活環境は大きく変化しています。そしてまた、日本全体の人口減少に伴う少子化及び高齢化への対応、高齢化の進展による郊外住宅団地のスポンジ化の再生、人口増加時期に整備した公共施設・社会インフラの維持、東日本大震災や平成28年（2016年）熊本地震、令和6年（2024年）能登半島地震といった未曾有の災害への対策、国際情勢等の変化に伴う有事への備え、豪雨や猛暑の要因と考えられる気候変動への対策（適応策・緩和策）、多様化する観光客への対応等、私たちは、未経験の課題に向き合わなければなりません。

こうした中で、未来のまちに向けては、市民、事業者、行政が「まちの課題を解決する主人公」として、本市の歴史や文化を継承しながら、課題解決に向けて共創し、そして、未来のまちづくりの主役が鎌倉で育つことに喜びや誇りを持つことができるまちを目指すことが必要です。

鎌倉というまちを、一隻の船に例えてみましょう。

波や天候は刻々と変わり、荒波や強風が予告なく襲ってきます。

その海を航海する船の乗組員が、立場や思想、年代・性別が異なろうとも、自分らしく、かつ自発的に、同じ方角に向かって、それぞれの役割を果たすこと。

それが刻々と変わる状況下でも船を前に進めます。

総合計画は、乗組員が頼りとする羅針盤です。

今回30年ぶりに基本構想と基本計画を改訂し、新たな羅針盤として、令和8年（2026年）度から令和16年（2034年）度を期間とする「鎌倉ビジョン2034」と、令和8年（2026年）度から令和12年（2030年）度を期間とする「鎌倉ミライ共創プラン2030」を策定しました。

変わり続ける社会という大海のなか

鎌倉の価値を守り、未来へ手渡すために。

羅針盤を手に、乗組員として、船を進めていきましょう。一丸となって。

Be the Crew.

「ミライへの航路を共に進む」